

豊平のあゆみ

～豊平橋編～

広く札幌市民から親しまれている、豊平川。

豊かな流れは今日も穏やかに、私たちのまちをゆったりと流れていますが、

かつては暴れ川と称されるほど激しい勢いを持ち、その姿も現在とは大きく異なっていました。

今月は、この川に初めて架けられたといわれる豊平橋の歴史を振り返ります。

2022年区制50周年
特別企画 第4回

区制施行から50周年の節目に、
豊平区の歴史をたどります

【詳細】区役所総務企画課 ☎ 822-2407

1 舟から橋へ

その昔、人々は豊平川を渡るために舟を利用していました。銭函と千歳・勇払を結ぶ「札幌越新道」往来のため、市内最初の本州からの定住者といわれる志村鉄一しむらてついちが、川に張り渡したコクワのつるをたどって丸木舟で人々を運んでいたそうです。その後、川を渡る旅人の増加により、明治4年に二連の丸木橋が架けされました。この橋が初代の豊平橋で、豊平川に初めて架けられた橋と言われています。

北海道大学附属図書館所蔵

出典:札幌沿革史



▲「明治四年及五年札幌市街之図」から川の様子が今とは違うことが分かる



出典:温故写真帖

▲明治初期の豊平橋

2 長きに渡る川との戦い

流され、壊される木造の橋

当時の橋は脆弱で、川が増水すると、すぐに流されてしましました。このため開拓使は、長く使える橋を目指し、外国人技術者のN・W・ホルトに設計を依頼。時計台や豊平館の設計者である安達喜幸なども加わり、明治8年に日本初の洋式の橋が完成しました。しかし、この橋でも約1年半後には洪水により壊されてしまいます。その後も、破壊された原因を調査して架け替えを行ったり、治水工事を行ったりと、たゆまぬ努力が続けられました。

木の橋から鉄の橋へ

明治30年、道庁は永久橋の建設を計画します。ちょうど木材が高価になってきたことなどもあり鉄橋を架設することとし、治水や橋梁工学の第一人者であった道庁技師岡崎文吉に設計を担当させました。建設中には洪水に襲われながらも明治31年に北海道で最初の鉄橋が完成。しかしこの橋も、明治42年の洪水には打ち勝てず、翌年の復旧工事も川の増水によって阻まれてしまいました。



▲ホルト設計の橋



出典:札幌土産

▲鉄橋となった豊平橋

名橋の誕生

その後、応急的に仮橋を架けてしのいでいましたが、まちの発展と共に、行き交う人や馬車などが増え、危険な状態となりました。そこで約3年の年月をかけ大正13年に完成したのが、名橋と名高い旧豊平橋です。橋につながれた現在の国道36号は当時より重要な幹線道路であり、また路面電車が橋を通ったことに



より、豊平橋はさらに必要な交通拠点となりました。

◀豊平橋開通記念絵はがき
※札幌市公文書館所蔵



札幌市公文書館所蔵

▲見物人でにぎわう旧豊平橋の渡橋式

3暮らしの変化に応えるために

旧豊平橋は、将来のまちの発展を考え、本州の大都市に建設される橋と同規模に造られました。しかし戦後の自動車の普及や経済成長は目覚ましく、昭和33年に始まった国道36号の拡幅もあり、車の渋滞が発生。安全性を高めるため、新たな橋への架け替えが決まりました。そして昭和41年に生まれ変わったのが現在の豊平橋です。機能性と経済性が重視されたため、アーチが特徴的で壮麗な旧豊平橋からはその姿を大きく変えましたが、走行性などに優れ、交通の流れはスムーズになりました。



▲旧豊平橋の往来の様子（昭和38年）



▲架け替え後に多くの自動車が走行する様子（昭和45年）

4歴史をつなないで今なおここに



▲現在の橋。白いアーチは「豊平川第一水管橋」のもの

日々多くの方に利用されている豊平橋。この橋が完成に至るまでには、多くの先人たちの努力や苦労がありました。数々の時代を越えて人や物をつなぎ、当時の優れた技術を集結させて何度も生まれ変わったこの橋は、今も私たちの生活を支え、まちの発展を見守り続けています。



次回もさまざまなテーマで
豊平区の歴史を紹介します。
お楽しみに！



【参考文献】『さっぽろ文庫4 豊平川』『さっぽろ文庫8 札幌の橋』『さっぽろ文庫22 市電物語』『さっぽろ文庫・別冊札幌歴史写真集〈明治編〉』『さっぽろ文庫・別冊札幌歴史地図〈明治編〉』『新札幌市史』など